精霊の話(その他)

かいと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
精霊の話（その他）

【Ｎコード】
Ｎ５８４２Ｐ

【作者名】
かいと

【あらすじ】
精霊シリーズの主人公達以外の話。
それぞれが誰かの視点による一人称です。
たまに三人称。
基本的には親世代の一話完結。
冒頭に誰視点かを必ず入れるので参考にしてください。
※サイトに掲載していた小説を推敲して投稿しています。
ちょっとずつ増やしていきます。

ウテンについて

※セイクウ視点

彼女は良い人というやつだ。

「君の愛情表現は変わってるよ」

ため息すら吐いて、僕は肩をすくめて見せた。

そうか？　と首を傾げて、髪を左右で金と黒に染め分けた彼女はカップに口を付ける。

「そうさ。そうでなかったら、なんで」

言葉を紡ぎながら、僕は口元まで運んでいたカップをゆっくりと下ろす。

「なんでこの中には薬物が入ってるんだい」

「お前はやっぱり気付くな。安心しろセイクウ、毒じゃあない」

自慢げに言って、彼女は微笑んだ。

この笑みが曲者なんだ、といつもながらに思う。

悪いことをしている自覚が無いんだから。

「ただ、新しい薬を作ったから実験体になってもらおうと思ってだな」

「だからね、せめて入れる前に言って欲しいって、僕もヒョウガキもカルライも言ってるだろう？」

「言ったら断るじゃないか」

「……この薬、何なんだい」

「小さくなる薬」

「そりゃあ断るよ」

至極簡単に、今日の夕飯のメニューを答えるように言い放つ彼女に、頭痛がしてくる。

しかし、頭を抱えるわけにはいかない。

頭痛に効くからと何か薬を飲まされかねないからだ。

「大丈夫、植物には成功している」

「……いろいろと間が抜けてるよ。実験段階の」

植物からすぐに成人男性へ移行するなんて、聞いたことも無い。

「まったく、チノにはこんなことしてないだろうね？」

少し不安になって言うと、立ち上がった彼女の手刀が額を打った。

痛い。

「なんて失礼なことを言うんだ。私は立派なお母さんだぞ」
「……結婚もしてないのに、子供を預かるなんて」
「いいじゃないか。チノは可愛い」
「そうだけどね……包帯はとってあげようよ」
「そのうちな。今は、嫌がる」
少し悲しそうに微笑んで、彼女は囁く。
「自分の額と頬を隠してるんだ」
「そう……」
子供の自己防衛なのだろう。
僕は、小さなチノを思い出した。
あの子に起きた悲劇に近い奇跡も。
「……さて、セイクウ」
彼女が言う。
僕は顔を上げて、誰もが異端だと叫んだ小さな子供を引き取った女性を見上げた。
彼女は良い人というやつだ。
「ちゃんと紅茶は飲んで行けよ？」

「飲まないから」

これさえなければ。

end

カルライについて

※ヒョウガキ視点

「そろそろ帰ったらどうだ？」

私が言うと、燃えるような色をした髪の男はいやだと言って机に懐いた。

女の目を奪ってやまない整った顔が、木製の机に頬擦りする。

「ここ、居心地良いしさぁ。今日は泊めてくれよ。ね？」

何が『ね？』だ、気色の悪い。

思いながら溜息を吐いて、やれやれと首を振りつつ本を開く。

丁度開いた頁に眼球の構造写真があって、眺めなれたそれを軽く視線で撫でた。

「そんな事をしたら、お前の所の姫君達は荒れるんじゃないのか？」

私の囁きに、細められていた目が見開かれた。

髪の色を映したように紅に染まった目が、こちらを見る。

「……もしかして、今日も来たのか？」

「いいや？　一昨日だが」

答えて、それから本を傍らに置く。

「凄かったぞ？　打撲に裂傷、ああ爪痕もあったか」

思い出すのは、同じ顔をした二人の少年だった。
月に数回、どちらかがどちらかに引き摺られるようにして、この館へとやって来る。

「どれだけ聞いても喧嘩したとしか言わないがな」

そんな言葉、嘘でしかない事など私にだって分かる。
その傷を負わせているのが誰なのかも。
なのにあの子供たちは、互いに母親を庇うのだ。

「お前からどうにか言えないのか、アレは」

「……言わなかったと思う？」

ぼそりと呟いて、赤髪の男は額を机に擦り付ける。

「言ったらさ、二人して赤ん坊の首絞めやがったんだぜ？」

「……何て言ったんだ」

「俺が二人とも預かるって」

「それは、お前……」

「ちゃんと、二人にも会うって言ったんだ。けどさ、二人とも俺が

子供に盗られるとか思ったみたいで」

普通、それって旦那の発想だよなぁ？　と呟きつつ、男は身を起こした。

机に両手を付いて立ち上がる。

「帰ろうかな」

呟きつつ、男は窓の外を見る。

顔にありありと帰りたくないと書いてあって、心底不思議になる。

「……何でお前はあの二人と一緒に居るんだ」

こうなる前に、別れる機会は数回あった筈だ。

私達が作ったそれを、むざむざ踏み潰して無視したのはこいつなのだ。

子供まで作って、その所為で更に離れることが出来なくなって、まるで泥沼じゃないか。

私の問いに男は答える。

「だって、あの子ら俺嫌いじゃないし」

無垢にすら思える、愚かな男の顔がこちらを向いた。

頭痛すら憶えるその馬鹿さ加減に、私はまた溜息を零して、水掻きの張った手で犬を追い払う仕草をしてやった。

「ならさっさと去れ。邪魔だ」

「うっわ、ヒョウガ酷い」

勝手なことを言いながら、男は笑って扉を開け、帰宅する為に歩き出す。

己が決して嫌う事の無い、女達と子供の待つ館へと帰っていく。

何て馬鹿な男だ、それでも父親かと、あの＞炎王＜の顔を見る度に私は思うのだ。

end

ヒョウガキについて

※ウテン視点

この男の事が良く理解出来ない。

「何でお前の眉間からは皺が消えないんだ」

やれやれと溜息を吐いて、私は奴を見つめた。
奴とは私の向かいで茶を啜る男の事であり、奴は五月蝿そうにこちらへと一瞥を向けてから、開いたままの本へと目を戻す。
見ている本の内容は体の神経についてで、恐らく頁は視神経の辺りだろう。

「おい、無視をするなよ？」

言いながらそっと置いてあった砂糖をカップへ入れてやろうとすると、水掻きのついた大きな掌が己のカップの口を覆う。
何だその行動は。私が毒でも入れるというのか。
むっとした顔をしたのだろう、こちらへともう一度一瞥投げてきた奴は、溜息混じりに口を開いた。

「お前に入れさせたら紅茶ではなくシロップになる。大人しく砂糖を置け」

言われて仕方なく、シチュー用の大きな木製スプーン山盛りに掬い上げていた砂糖を戻し、砂糖を入れてあったタッパーを少し向こうへと押し遣る。

「チノなら喜んで入れさせてくれるのに」

溜息混じりに呟くと、少し強く本が閉じられた。
おや、と視線を向けると、奴がこちらを睨み付けている。
その視線を見返して、何を言わんとしたいか気付いた私は、軽く手を横に振った。

「大丈夫だ、歯磨きはちゃんとやらせている」

「そういう問題じゃない」

「ん？」

どうやら問題は違ったらしい。
首を傾げた私へ、奴が言う。

「お前、チノを糖尿にしたいのか」

寄越された言葉に、私はぱちりと瞬きをした。

「私が大丈夫な間は大丈夫だろう？」

私の方がチノより甘味をとっている。何かあるというのなら、それは私からのはずだ。
軽く胸を張ると、やってられない、とばかりに首を振られた。
先程よりも若干多めの皺が眉間に寄っている。

「……なぁ、ヒョウガキ」

「……何だ」

そのまま、また本を開いた奴へと声を掛けると、今度は無視されずに返事があった。

それに微笑んで、私は尋ねる。

「何でお前の眉間からは皺が消えないんだ」

「……」

最初に戻った私の疑問に、どうやら頭痛がするのか長い指をこめかみへと当てて、奴は答えを紡いだ。

「……お前達がそうさせてるんだ」

お前達、というのは、私とカルライとセイクウの事だろうか。

失礼な奴め、と呟いて、私は自分用のカップに口を付けた。

口に広がる紅茶の苦味と砂糖の甘みと、ざらりとした溶け残りの感触に、ふう、と息を吐く。

この位は甘くないと美味くないと思うのだが。

やっぱり、ヒョウガキは分からない。

e
n
d

セイクウについて

※三人称

＞風王＜についてどう思っているか、という問いかけに、三人の精霊王は奇妙な顔をした。
そしてそれぞれが溜め息を吐き、初めに口を開いたのは＞地王＜だった。

「黒い髪がとっても長くてうざったい」

久しぶりに幼馴染達と集まった一室で、彼女は湯飲みから茶を啜る。

「飄々としていて捕らえ所が無く面倒くさい」

さらりと述べた＞氷王＜が、ソファに座ったまま、膝の上の本を捲って視線を落とす。

「……親馬鹿？」

最後に残された＞炎王＜が、赤い髪を揺らしながらこっそりと呟いた。
すぐに左右から視線が返る。

「えっと……駄目？」

「当たり前だろう」

「親馬鹿はお前の代名詞だ」

「代名されちゃうんだ……」

うわぁ、といやな顔をする＞炎王＜に、とにかくさっさと次の意見を出せ、と＞地王＜が声を上げた。

２杯目の玉露を湯のみに入れ、それにテーブル端の砂糖入りタッパーから取り出した砂糖を２杯入れる。

「……おい」

その様子を見ていた＞氷王＜が眼を光らせた。

その視線に気付いて、分かってる、２杯だけだ、と答え、＞地王＜は３杯目の一掬いをタッパーに戻した。

「うーん……えぇー……っと……あ！」

少し考え込んだ＞炎王＜は、ようやく思い付いて両手を打ち合わせた。

「何？」

「何だ？」

ほぼ同時に、＞炎王＜の両隣から声が上がる。

＞炎王＜は胸を張った。

「俺の親友！」

「……」

「……」

「何だよその目は」

可哀相な人を哀れむ視線を送ってくる両隣の親友に、＞炎王＜は顔を顰める。

だが、すぐに彼もその視線の意味を理解した。

突然、背後から2本の腕が伸ばされ、首と肩を捕まえたからだ。

その手が誰のものかなど、問うまでもない。

＞炎王＜の顔から血の気が失せた。

いつの間に現れたのかと、振り返ろうとするがそれも出来ない。

「ありがとう、カルライ！　そんな風に言ってくれるなんて……僕は嬉しい！」

声は正しく＞風王＜のもの。

それから、抱擁と呼ぶにはあまりにも過激過ぎる締め上げが、＞炎王＜の主に頚椎と肋骨に加えられた。

＞炎王＜の声無き絶叫が放たれようとして、失敗する。

助ける気も起きないのか、湯のみを持ったまま、＞地王＜は＞氷王＜の所まで移動して、締め上げられる＞炎王＜と加害者を眺めた。

「あいつを一言で片付けると？」

「はた迷惑な感動屋」

「まったくその通り」

迂闊に＞風王＜を感動させるような事を口にしてはいけない。

それを常に失念しているらしい＞炎王＜を見る二人の視線は、馬鹿な子犬を眺める時の愛に満ちていた。

end

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5842p/

精霊の話(その他)

2010年12月30日23時06分発行